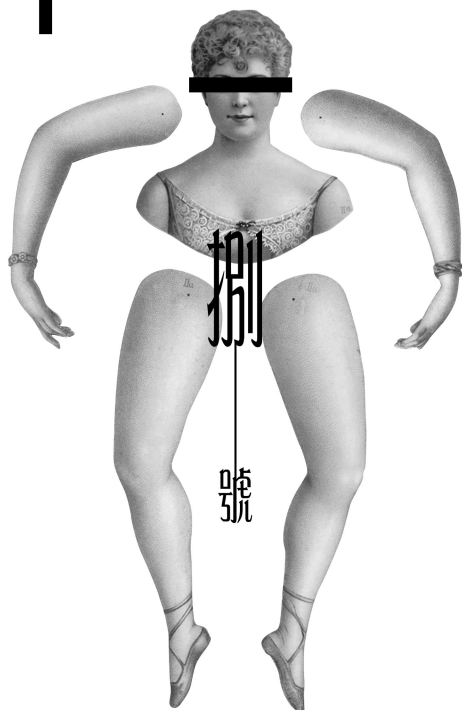


非実在 ~Airmys~

探偵小説研究会

エアミステリ



エアミステリ研究会

非実在探偵小説研究会 8 号 目次

企画

企画 1 お題競作「ホラーミステリ」

赤い糸

紫藤はるか 6

人形どもがやつてくる...

佐倉丸春 39

檻の中の少女たち

麻里邑圭人 70

クトゥルフ陰陽捕物帳

光田寿 91

けふをかぎりの

岡村美樹男 109

痕跡

根倉野蜜柑 142

企画 2 短編ミステリ・オールタイムベストアンケート結果発表《完全版》

松井和翠 161

企画 3 ショート・ショート 224

読み切り短編

円盤五〇枚の謎

田中大牙 201

その他

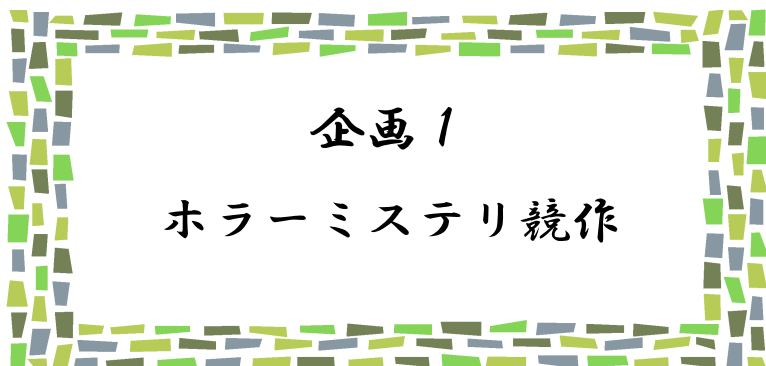
〈連載〉富士見ミステリー文庫ガイド 第一回

ないとー 218

〈評論〉この解説がすごい！

勝谷栖三栖 248

表紙・扉ページ・Sイラスト ウスダアヤ



企画 1

ホラーミステリ競作

お題を元に自由に競作をするコーナーです。

偶数号恒例の企画ですが、今回のお題は「ホラーミステリ」です。

「ホラー」と一言で言っても和物、洋物、怪物、幽霊、スプラッタからサイコ的なものなどいろんな方向性があります。

あまり厳密に定義せず、書いた人がホラーだと思えばいいんじゃない？ とゆるい縛りで企画しております。人によっては「これはホラーじゃないな（笑）」と思われる作品があるかもしれませんが、まあそこは寛大な心で受け止めて貰えればと。

では、競作企画の 6 作品、お楽しみ下さい。

赤い糸

紫藤はるか

1

これは昔、このあたりに伝わる話。

この藤木野^{ふじきの}は、湖を抱えた小さな集落だった。その湖は年に一度夏の終わりになると氾濫し、集落に大きな爪痕を残した。いまでこそ地質ゆえの水害だとわかつているが、昔は湖に棲むといわれる怒れる龍の仕業であると伝えられていた。

またその季節が巡ってきたとき、ちようどひとりの歩き巫女が藤木野の集落に流れ着いた。

それは夏の、寒い夜だった。

その巫女は北の方から来たという。歩き巫女は……ああ——歩き巫女というのは各地を歩き旅して祈禱^{やなぎた}なんかをする巫女のことだ。柳田翁曰く、歩き巫女というのは

諏訪神社の……おっと、話が逸れたな。戻そう。

その歩き巫女は、ひどく美しい巫女だった。そして盲目ではなかった。本来、巫女とは盲目であることが多い。盲目でない巫女というのは、その能力は本物か、或いはまったくのモグリか、ということだ。その素性もたしかでないのに、村人は美しい巫女の力を頼った。藁^{わら}にもする思いだったのだろう。

巫女は力になれるのなら、と了承し湖のほとりに立った。すると湖の底から巨大な龍がずるずると現れた。その龍はいった。

『お前が私の嫁となるのなら、私は大人しく眠りにつくこう』

『わかりました。ですが今すぐにとというのは。明日の晩までお待ちください』

巫女は二つ返事でそういったが、巫女も神の使いとはいえ人の子だ。龍の嫁になるということは人身御供——すなわち死を意味する。一日の猶予は心の整理やなんかがあったからだろう。

巫女が逗留先に戻ったあと、龍は村人にこつそりとう告げた。

『あいつはそういつて逃げるつもりだ。明日の晩という

のは逃げるためにいったのだ。必ず生きたまま嫁に越させるのだ。さもなくば私は大いなる災いを村にもたらさ
だろう』

その晩、巫女には盛大に料理が振る舞われた。小さな
集落だ。質素なものではあったが、巫女にも村人にも、
最期の食事だという意識があったのだろう。巫女はいい
気分になり、とてもこの世のものとは思えない美しい舞
を踊ったという。

晩餐が終わり、その夜のことだった。

巫女が宿で寝入っていると、不意の激痛で目を覚まし
た。巫女は身体を起こしたが、辺りは真つ暗なままだ。
月明かりすら目に入らない。鋭く刺す痛みが、闇の中か
ら巫女の瞳を襲ってきた。巫女は瞳を開けようとする。

——目が開かない。

なぜと思い触れてみると、濡れた生糸の感触がした。
巫女の^{まなこ}瞳は、血で真つ赤に染まった生糸でびつちりと縫
い合わされていた。目が開かないように、執拗なまでに。

……当然、村人の仕業だった。村人も必死だったんだ
ね。龍の怒りを鎮めるため——水害を止めるため。村人
は^か顔を掻き^{むし}ながら叫び狂乱する巫女の両腕を縛り上

げ、湖に投げ込んだ。血で赤く染まった巫女は、ゆつ
りと、ゆつくりと沈んでいった……。

巫女が逃げるかもしれない。だが龍の妃にするために
は殺してはならない。生かさず殺さず。だからまず目を
潰したんだ。神性を高めるのに視界をなくすのは常套だ
し、それに本来の巫女は盲目であつても構わないのだか
ら……。

それ以来、湖での水害がなくなったという。

……でも話は終わらない。それと引き換えに、また別
の災いが起きたんだ。巫女は村人を恨みながら、湖の底
へ沈んでいった。自ら御供を引き受けたとはいえ、目を
縫われて無理やり投げ込まれたら怒つてもしかたない。
そういった意味では、巫女の力は本物だったんだろう。
そうして『紅巫女の呪い』が生まれてしまった。

水害は収まった。しかし、何年かに一度、夏の終わり
になると……目を縫われた村人の死体が——

続きは「非実在探偵小説研究
会8号」でお楽しみ下さい。

【短編ミステリ・オールタイムベストアンケート結果発表 《完全版》】

松井 和翠

—なぜミステリ短編のオールタイムベスト企画はないのだろうか—

—一度でいいから、ミステリ短編のベスト表が見てみたい—

—誰もやらないなら、自分でやってしまえばいい—

そんな私の個人的な欲望から始まったこの企画が、まさかここまで大きなものになるとは、思ってもみませんでした。

【短編ミステリ・オールタイムベストアンケート】、通称「ATB短編」は、国内編・海外編併せてのべ三十一名の方々から投票をいただき、投票された作品数は一三九〇編に上りました。また、ミステリ編の後には、怪談・SF・時代・恋愛の各ジャンル短編、ライトノベルミステリ・フランスミステリ・非英仏語圏ミステリの各分野のATB企画が続々と開催され、遂にはプロダクション・レアル・プロダクション・プロダクション・プロダクションといった音楽の分野にまで波及していきました。ATB企画の隆盛は発起人として、これに勝る喜びはありません。

今回は、この紙上を借りて、これまでATBに協力していただいた方々に【結果発表《完全版》】をお送りし、その恩返しとさせていただきます。また、以下のATBに関する文責はすべて筆者・松井和翠にあることを、初めに言い添えておきます。

【国内編】

五月三十一日から六月六日までの七日間を投票期間として開催されたATB企画の第一弾です。一七六名の方々から投票をいただき、投票された作品数は八二五作品でした。

ベスト一〇は、新本格の代表作品を筆頭に、定番の名作、日常の謎を主題とした二作、そして新鋭の作品がバランスよく並びました。その中でも、ベスト一〇内に二作を送りこんだ連城三紀彦・麻耶雄嵩の両作家の力量は流石といえるべきでしょう。特に、連城は作家別ランキングでも二位におよそ一〇〇ポイントの差をつけて圧勝。奇しくも、昨年惜しまれつつこの世を去った作者への追悼となりました。五十位以内に目を移すと、今度は泡坂妻夫の活躍が光ります。票が割れて最高位こそ二十五位でしたが、五十位以内なんと九作品、一〇〇位まで含めると十一作品がランクイン。対して、五十一位から一〇〇位までは、なかなか多彩な顔ぶれ。多数の作品をランクインさせた江戸川乱歩・有栖川有栖・米澤穂信ら古今の名手に交じって、飛鳥井士朗・小貫風樹・中西智明といった(ほぼ)アマチュア作家の手に成る作品たちが異彩を放っています。また、玩具堂がライトノベルから唯一の一〇〇位入り、一〇〇位以内には入りませんでした。『Q.E.D. 証明終了』が六票を獲得するなど多媒体の躍進も目立ちました。その代わり、松本清張・仁木悦子・結城昌治といった五〇年代後半から七〇年代までを支えた作家たちの作品が軒並み一〇〇位圏外。特に、六〇年代に発表された作品は一編もベスト一〇〇に入っていない。この時代の作家・作品の再評価が、次に我々に課せられた使命でしょう。

【海外編】

六月九日から六月十四日までの六日間を投票期間として開催された海外編は一三七名の方々から投票をいただき、投票された作品数は五六七作品でした。

―古典強し―

この一言に尽きるでしょう。古典、その中でも特に不可能犯罪ものが人気の高さを見せた結果となりました。ベスト一〇の内、六作品が広義の不可能犯罪もの、そのほとんどが一九五〇年以前の作品でした。最も新しい作品でも一九六八年（クリスチアナ・ブランド）です。圧倒的な得票で第一位に輝いた作品はその象徴といえます。しかし、そんな《古典・本格・優勢》の中にあっても複数の作品をランキンさせたロアルド・ダール、スタンリー・エリン、フレドリック・ブラウンら異色作家の底力は見事なものでした。一方、「東洋趣味／燕京綺譚」（ヘレン・マクロイ）や「特別料理」（エリン）、「八岐の園」（ホルヘ・ルイヘ・ボルヘス）らが一〇〇位圏外に落ちる波乱も。対して、苦しい戦いを強いられた現代作家は、存命作家としては最高位のジェフリー・デューヴァー、MWA受賞作をランキンさせたアン・ペリー、二作品が一〇〇位圏内に食い込んだローレンス・ブロック、北欧の雄フェルナンド・フォン・シーラッハらが名を連ね、今後の翻訳ミステリに期待を持たせてくれました。彼らの新しい代表作の登場、そして新たな作家の台頭をそれぞれ鶴首して待ちましょう。

国内編・海外編、共通して言えるのは良質なアンソロジーの存在が必要不可欠だということです。特に翻訳ミステリは、個人短編集が出版される機会が少ないため、一般の読者に読み落とされている作品が数多くあるはず。そういった意味で、今年刊行された米澤穂信編『世界堂書店』は素晴らしい企画でした。是非、後続の企画を期待したいところです。

この他にも、触れたいことはたくさんありますが、私がうだうだ言うよりも、実際結果をご覧ください。それでは――

《さあさあ、おなかへお入りください》

(宮沢賢治『注文の多い料理店』より)

【短編ミステリオールタイムベストアンケート実施要項】

- ① 投票者一名が投票できるのは最大一〇作品までとする。
- ② 順位により一位が一〇点、二位が九点……一〇位が一点と点数をカウントする。
- ③ 順位をつけず順不同で投票する場合の点数は一律五・五点となる。
- ④ 投票作品が一〇作品未満の場合も同様に五・五点となる。
- ⑤ 対象は、国内（及び海外）のミステリ短編とする。その際、「ミステリ」「短編」の定義は個々人の判断に一任する。
- ⑥ 漫画作品への投票も可とする。



非実在探偵小説研究会～Airmys～ 8 号

発行日 2014年11月24日
発行 エアミステリ研究会
連絡先 airmysdj@gmail.com
<http://www43.atwiki.jp/airmys-dj/>
価格 800円
印刷所 株式会社ポプルス

Special Thanks

編集作業をお手伝いして下さったエアミス研有志メンバー